

# 関西学院を愛して

## — 余田博通先生社会学部葬式辞 —

船 本 弘毅

(社会学部教授・宗教主事)

去る1983年12月4日午前1時40分、天に召されました敬愛する故余田博通先生をお送りし、御遺族の上に慰めを祈るために、わたしたちは、今、ここに、集まっております。先生は大正5年8月のお産まれですから、67年と4ヶ月の地上の歩みがありました。

余田先生は大きな方がありました。162cm84kgという体格は、堂々としておられましたが、単にその外でなく、いわば大きな存在と申しますか、存在感の大きく重い方がありました。社会学部の教授会では、いつも部屋の角のあたりに座しておられましたが、それは「隅のかしら石」という感じであり、全体にその存在を印象づけると共に、いつも重味のある意見を述べられました。またその大きな体を、極めて精力的に動かして、学院のいたる所で活躍をなさいました。今、社会学部に、そして関西学院全体にとって、大きな、本当に大きな穴がぽっかりとあいた思いを禁じることが出来ません。

先生は極めて教育熱心な方がありました。先程領家先生によって余田先生の略歴が紹介されましたように、お亡くなりになる直前まで8年間にわたって関西学院大学の総合教育研究室の責任をお持ちになりました。この総研から「教育開発シリーズ」という新書版の研究書が刊行されておりますが、先生はご自身でその1号と3号に『私のセミナー・大学における小集団教育の実験』という書を著わしておられます。

『続篇』の方の「あとがき」に次のような言葉が記されています。

「1973年頃から始めたこのような『私のセミナー』は、試行錯誤を重ねながらきた。総合教育研究室長の責任を負うてからは、このようなやり方を、とくに意識して改めながら実験して来た。ふり返ってみると失敗の連続であった。一度手順を誤ると、次にそれを改めるのは1年後になる。また新しい要素を加えようとしても1年あとのことになる。実験は遅々として進まない。いまだに完成したものにならない。」

このような実験経過を書き記すことは、わたしの恥をさらすことになり、誰も好むところではない。しかしあたしは大学の権威のために、教授たる私の恥をあえてさらした。御批判を乞う

余田先生はこのような若々しい教育への熱情を持ち続けた方がありました。そしてその働きは、学会の活動、社会学部での創設・運営、また教育・研究の業、総合教育研究室での働き、体育会会长としての学生活動への温かい理解へと及び、さらに中国の吉林大学との提携に関しては、先遣代表団団長として、1981年に中国に渡り、今日の関西学院大学と吉林大学の姉妹校関係締結への道を開かれたのでありました。

まだ多くの夢を持ち続けられ、その働きが期待されたのであります、昨年秋ごろより体の不調を自覚され、昨年12月28日に千里救急センターに最初の入院、2月1日には阪大病院に入院され、15日に肺切除の手術を受けられました。3月23日には退院され、その後再び待たれたのであります、9月22日に茨木市の友絆会病院に再入院され、遂に天に召されたのは大変残念なことであり、惜しみても余りあるものがございます。

先生が亡くなられる2週間前の11月19日の土曜日でしたが、研究室で仕事をしておりましたら、先生の奥様から電話があり、先生が会いたいと言っておられるとのことがありました。そこでわたしは直ちに病院に先生をお訪ねいたしました。その日、輸血をしながらではありましたが、先生はとてもお元気であります。そして恐らく先生がご自身で字をお書きになったのは、それが最後になられたのではないかと思

いますが、細かいメモを書いておられまして、それを見ながら、先生はご自分の生涯を振り返り、特に精神的遍歴についていろんな事をお話し下さいました。南向きの病室には温かい日が差し込み、やがてそれが西の千里丘陵の彼方に没して行くまで2時間越える長い面会がありました。淡々と先生はお話になりましたが、すでに自からの死の接近を感じておられる先生との、それは息づまるような真剣な対話がありました。

大阪の堀川小学校から北野中学に進み、やがて関西学院の高等商業学校に入学、さらに九州帝国大学法文学部に進まれた過程を思い出をまじえて話しながら、「昭和恐慌」と「農村恐慌」とが、自分の生涯の課題を決めることになったこと、医者であったお父様が扇町公園の近くに住んでおられ、失業者の溢れる社会、娘を売らねば家族が生きていけない農村の実状に触れたことが、自分の進路を決定づけ、そのような体験の中で社会への認識と正義感が形成されたことなどを、実に熱っぽく先生は語られました。

そして関西学院で受けた教育が今日まで自分を支えて来た力であったこと、聖書の山上の説教に教えられ導かれて来たこと、関西学院が真実の人間形成の場であり、学院で学んだことを喜びとし誇りとする学生を産み出していくかねばならないと思うということなど、とても重い病人とは思えない力強さで、次々とお語りになりました。

お別れの時間が来た時、「先生お疲れになつたでしょう」と申しますと、「いや今日は實に楽しかった、嬉しかったよ」とにっこり笑われたお顔は印象的でありました。最後に、「先生お祈りしましようか」と申しますと、「祈ってくれ」とおっしゃるので先生の手を握って祈りを捧げました。祈り終ると、先生は實に大きな、はっきりした声で、「アーメン」と唱えられました。その声と、その時の嬉しそうな先生の表情を、わたしは今も忘れることができません。

一人の人間として、自らの生に忠実に、また誠実に生きぬかれた余田先生、母校であり、29年間にわたって教育研究に打ち込まれた関西学院への深い愛と熱意がみなぎっている余田博通先生を、ひしひしと感じさせられる対話であり、交わりがありました。

新約聖書のテモテへの第二の手紙にある「わたしが世を去るべき時はきた。わたしは戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくした」(4:7)という聖句を、わたしは思い起こしておりました。

余田先生は聖書の「山上の説教」が、お好きであります。その一節を先程読んでいただきましたが、こう記されております。

「野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、あなたがたに言うが、栄華をきわめた時のソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかつた。きょうは生えていて、あすは炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように裝って下さるのなら、あなたがたに、それ以上よくしてくださいらないはずがあろうか。ああ、信仰の薄い者たちよ。だから、何を食べようか、何を飲もうか、あるいは何を着ようかと言つて思いわずらうな」(マタイによる福音書6:28-31)。

はかない弱い存在にすぎない野の花、空の鳥が、しかし神の守りのなかに生を保たれている。その深い愛と恵みの事実に目を向けさせることによって、主は、あなたがたはいかに生きるのかと、問われたのであります。

余田先生はクリスチヤンではありませんでした。しかし、関西学院で学び、教え、生活する中で、神の御手の中にある自らの生を感謝して生きようとされたのであります。先生の生涯は決してこの世的に言って、順調ではありませんでした。紆余曲折があり、苦しまれた時がありました。挫折があり、変化の多い、波乱に富んだ人生であります。しかし先生はその生涯を、社会への正義と人間への愛とを貫いて、ひたすらに歩み続けられました。そこには一筋の美しい歩みのあとが残されています。

関西学院大学には、学生たちが自分たちの手で作ります卒業記念アルバムがあります。昨年のアルバムは、ゼミ生の写真の横にゼミの学生のことばと、ゼミ担当教師のことばとを記していますが、これは余田先生の人となりを実によく言いあらわしていると思います。

先ず学生の声、

「我々のゼミは、教授と学生というよりは、むしろお父さんとその子供たちといった感じで、いつも先生のやさしさに包まれながら運営してきました。

コンパは他のどのゼミにも負けない位、騒がしく、先生も幼稚なわたしたち相手に一緒になって踊ったり、歌ったり、本当に良くしてくださいました。

先生、二年間どうもありがとうございました。」

それに応えた余田先生のことばは、次の三行からなっています。

「私は誠実をモットーとしています。

賛成の人はこの指たかれ！」

充実した一生を祈る」

先生の人柄を彷彿とさせる文章であります。先生を失った悲しみは深く、その穴は大きいものですが、生涯を誠実に生きぬかれた先生を主のみ手にゆだね、わたしたちもまたそれぞれの人生の駆場を、先生のように誠実に走りぬいていきたいものであります。

先生は御家族をとても大切になさいました。隆子夫人の病床での看護は、頭の下がる思いがいたしました。小さな椅子で幾晩もお過しになったことでしょうが、明るい奥様の笑顔に先生はどんなにか安らぎを覚え、励ましと慰めを得られたことであります。そして病床から奥様に語りかける先生の態度は信頼にみちたものであり、40年を共に生きられた美しい夫婦の像がそこにありました。御子息のことを語られ、お嬢さまのことを語られる時の、先生のうれしそうな、またやさしい表情は印象的でした。亡くなられる数日前にお訪ねいたしました時、丁度、関西学院大学総合教育研究室の十周年の記念号『創意と交流』が先生の枕許に届いておりました。あの題字、篆刻というのでしょうか、は、嫁つがれたお嬢様の作品ですが、目を細めて、ほこらしげにその出来栄えを説明された姿を、忘れる事はできません。

残された御遺族は、どんなにか深い悲しみと寂しさの中にあられることかと思いますが、神の守りと愛による慰めを切にお祈り申し上げて、告別のことばといたします。